

第3章 欧州地域文化振興政策

地域の文化的振興に関わる欧州規模の組織が二つ存在する。すなわち、一つは欧州評議会（le Conseil de l'Europe）（第1節）であり、もう一つは言うまでもなく欧州連合（EU）（第2節）である。

第1節 欧州評議会

欧州評議会の活動領域の大部分は、欧州社会における人間の地位に関するものである。欧州評議会憲章はその前文において、確かに社会的・経済的進歩をうたっている。しかし、経済協力開発機構 OECD が経済協力に活動を集中するにつれて、欧州評議会の活動は、個人の保護と社会的・経済的・文化的権利の促進に重点を移して来た。従って、ストラスブールに本拠を置く欧州評議会は、現実の活動分野を考慮するならば、加盟国における全ての文化関連企画に関わりを持っていることになるが（1）、欧州評議会の活動方針を見れば、この組織が自らの権限に忠実であろうとしていることが読み取れる（2）。

1 活動領域

「欧州文化都市」は本来、EU加盟国（B）から構成される欧州評議会（A）の任務に属する活動である。

A 任務

欧州評議会は、欧州人としてのアイデンティティ意識を促すことを望んで来た。その広範な行動分野の中でも、特に欧州の文化的遺産の保護と奨励、そして欧州人としてのアイデンティティの促進を、欧州評議会は推進して来た。つまり欧州評議会は、社会的・文化的並びに法律的な分野の技術的活動にこれまで、努力を集中してきたのである。

1954年12月11日にパリで採択され1955年4月5日に発効した欧州文化協定は、本来、文化面での協力のためのものである。協定の目的は、「欧州文化の保護とその発展を促進するため、共同行動の政策を取る」ことである。協定署名国の各々は、「自國にある欧州共通の文化遺産を保護」し、かつ「欧州の利益となるよう文化的活動を発展させるために」協力すると約束している。こうして、「欧州評議会の文化・教育政策

に関する提言を、その閣僚委員会のために作成」し、憲章署名の25カ国が共同出資する文化基金を運営するために、文化協力会議（Conseil de la coopération culturelle）が設置されたのである。

B 加盟国

EC加盟の12カ国は同時に、欧州評議会加盟国でもある。この二重加盟が、二つの欧洲組織の間に重複による問題を惹き起こす。両組織間のあらゆる競合を避けるためには、法的に相互の関係を整理強化する必要がある。つまり、共通の行動領域では両欧洲組織間の協力を優先し、同時に各々の特性を守ることが必要なのである。

2 方針

欧州評議会は、文化をその主要な活動領域の一つとしている。そして、この活動領域の重要性は、閣僚委員会を含む様々な機関によって、これまで再三にわたって指摘されてきた。さらに文化、とりわけ「欧洲の文化的アイデンティティ」が欧州評議会の管轄する領域であることは、数多くの宣言が繰り返し指摘している。そして欧州評議会は、これまで再三にわたって（A）、欧州評議会の担当する領域にECが干渉することのないよう、自らの権限の在り方を指摘して来たのである（B）。

A 宣言

当初から欧州評議会は、文化の領域における自らの権能行使する意図を確認してきた。

文化的自覚に関する1985年4月25日の（85）6号決議の中で、欧州評議会の閣僚委員会は「共通の文化的歴史の結果としての欧洲共通の伝統とアイデンティティーは、欧洲に存在する相異なる政治体制の間の境界線で、その広がりを区切られるものではないことに留意」している。閣僚委員会はまた、東欧諸国への門戸開放を勧告して、「閣僚権限の代理者は、文化協力会議の助力を得て、欧州評議会非加盟もしくは欧洲文化協定非参加の欧州諸国との協力を緊密化し得ると思われる分野を明らかにし、これを提言するのが任務である」としているのである。

欧洲文化協力に関する（86）3号決議は、ECとの関係で、欧州評議会の役割を強化することを目指したものである。この決議において欧州評議会の閣僚委員会は—

- 「 i 文化協力は欧州評議会の行動の基礎であり、従って欧州評議会の諸活動の中で適切な優先順位を与えられるべきであること。
- ii 欧州評議会及び文化協定の重要性に鑑みて、欧州評議会における文化協力が、

文化的多様性を重要な一要素とする欧州のアイデンティティーの向上のために、とりわけ適切な枠組みを成すこと。

iii 欧州評議会の文化行動計画は、現代文化、政府間協力活動、加盟諸国の世論に多大な影響を与えるような具体的行動など、重大な問題についての討論を伴うものでなければならない。それとともに欧洲評議会はまた、諸国政府が文化・教育政策を立案する際に解決策を見出す助けとなり得るような経験の交流を行う機関としての役割を、基本理念として維持しなければならないこと。

(略)

v 欧州評議会における文化協力は、文化の領域における現代社会の変化を考慮するものでなければならないこと。」
一を確認しているのである。

B 結果

欧洲評議会が文化に関する権能を絶えず確認・主張し続けたことによって、ECはそれを考慮せざるを得なくなった。その結果1990年、EC閣僚理事会は、「欧洲文化月間」の開催において、欧洲評議会との連携を望むと宣言したのであった。ただし、その宣言が勧告する協力の在り方については、具体性が欠如している。

第2節 欧州連合 EU

ECは文化の領域に独自の権能を持っていなかったが、その行動領域に、他の分野との関係で、文化を含めることは可能であった（1）。他方、ECの複数の機関が、「欧洲文化都市」に関心を抱いている事実がある（2）。

1 行動の領域

文化はECが担う使命には含まれていない（A）。そのため、文化の領域への介入は、この分野の権能を持つ欧州機関たる欧洲評議会との連携を必要とする（B）。

A 独自の使命

欧洲経済共同体(EEC)条約は、関税同盟と市場統合を等しく実現することに由来する共通政策の必要性を指摘している。文化に関して言えば、ECの権能の領域に文化そのものは含まれていないが、分野別の政策の枠組みの中で介入することは可能である。

ここで確認しておくべき重要な事実は、「欧洲文化都市」のための資金が、ECの教育並びに域外向けの予算措置部門に現われていることである。つまり、すべての文化的活動は、隣接項目との抱き合いで示されており、独自の項目が立てられていないのである。

EUは、マーストリヒト（Maastricht）条約の適用によって、文化に関しても独自の権能を持つことになるであろう。それまでは、ECの文化領域での活動は、分野別政策の拡大なのである。ECは、文化以外の領域について資金を有しているが、文化領域については持っていない。そこで、文化に関する権能を持つ欧洲組織との協力が有益であり、必要でさえある。

B 欧州評議会との協力

既に1983年、EC閣僚理事会はコミュニケを発表して、次のように述べている—「ECはいかなる仕方においても、欧洲評議会の権能とその活動を侵害しようと望まない。ECは欧洲評議会との、建設的な協力を追求するであろう」と。しかし、欧洲評議会が資金の不足から、文化の領域でイニシアチブを取るに当たって、ECの貢献を仰ぐ傾向にあることが、これまでに既に確認されている。かくして欧洲評議会の閣僚委員会は、1985年4月25日の（85）5号決議で、「できる限り広範な枠組みの中で、相互の組織的性格とその手続きの相違を充分に尊重しつつ協力の進展を実現するため、欧洲理事会とECとのより緊密な協力関係を促進する決意」を表明しているのである。

従って両組織の間の協力は、極めて有益である。殊にEUは、欧洲評議会が「欧洲文化都市」に対する「欧洲文化月間」の諸イベント全体に活発に参加することを歓迎しているから、尚更そうである。欧洲評議会は今後、これまでとは違って、文化の領域に限定的にしか介入しないというようなことはなくなるであろう。それどころか欧洲評議会は今や、「欧洲文化基金（Fonds Culturel Européen）」と呼ばれる資金を持つようになっているから、具体的に諸イベントに関わることができよう。

いずれにせよ、両組織は多くの共通の加盟国を有しているため、関係は今後好転していくであろう。

2 諸機関

「欧洲文化都市」が誕生したのはECの閣僚理事会においてであったが（A）、ECの欧洲議会もまた、この文化行事に关心を抱いている（B）。

A EC閣僚理事会

「歐州文化都市」の企画を決定したのは、EC加盟国の大蔵担当大臣会議であった。EC委員会がこの行事に関する決定に全く加わっていないことは、大いに意味のある事実である。EC委員会は、候補都市の間から開催都市を選定することに関して、何らの権限も持っていない。EC委員会はただ、欧州議会が議決した予算に組込まれている助成金の交付を行うだけである。

開催都市選定の方法、都市が立候補する方法とその手続などは、すべてEC閣僚理事会の決定の中に規定されている。ところがEC閣僚理事会は、助成金の交付金額を決定する一切の権限を持っていないのである。

B 欧州議会

欧州議会は1990年11月23日、「歐州文化都市」に関する決議を採択した。この決議は、この行事の目的をより特定化するよう勧告し、さらに1990年以後については、テーマを前もって発表した上で、EC閣僚理事会が欧州議会と共同して二つの都市を選定し、かつテーマを二都市に共通のものとするよう強く要請したのである。この決議は、「歐州文化月間」創設の決定から数ヵ月後に行われたものである。欧州議会は、EC閣僚理事会と同様、東欧諸国への門戸開放に賛同しているが、他方で当該年と翌年の間に開催イベントの一貫性を持たせるため、EC委員会がイベント開催都市のために、関係都市が相互に接触し、同時に助言を与えることができるよう、公式かつ常設の連絡機関を創設すべきであると提言した。

欧州議会は同様にして、この領域でのECの貢献度を更に一層増大させることに賛意を表明し、「歐州文化都市」が欧州的性格を持って、有意義かつ恒常的な活動につながるようにすべきだとした。ところが現在EUは、助成金額を次第に減少させつつあって、欧州議会のこの意図はほとんど無視されているのである。

この欧州議会の決議の中で最も重要な要請であると思われるは、1996年以後の「歐州文化都市」開催都市の選択に、欧州議会が一定の役割を果たし、開催企画に示されるイベントとその活動に自らも参加したいという希望である。欧州議会はいまだに、開催イベントに積極的な役割を果たしていないが、選挙による代表者が構成するEU唯一の機関となる以上は、恐らく将来の発展の過程で、そのような役割を果たすことになろう。

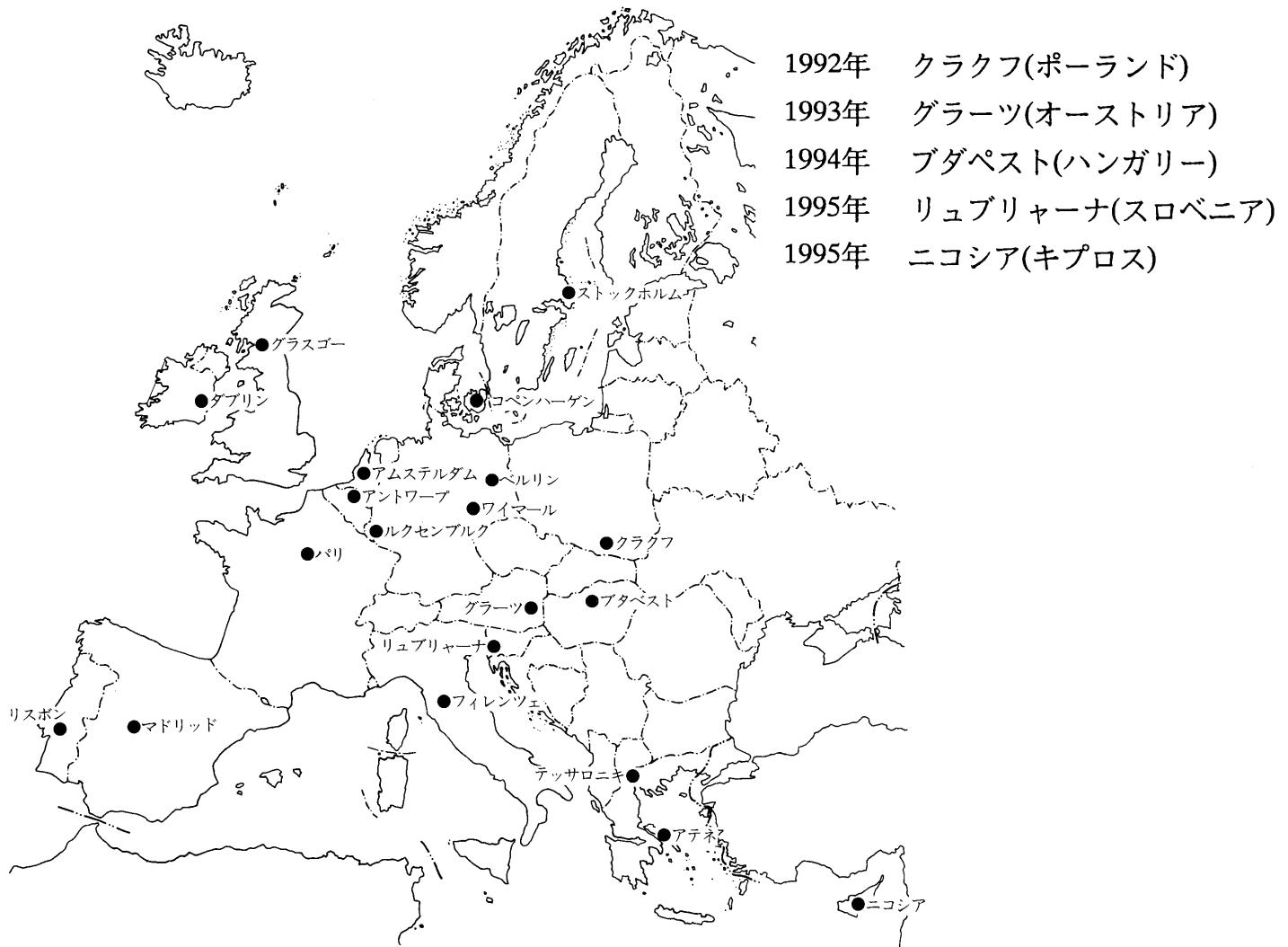
第4章 「欧洲文化都市」及び「欧洲文化月間」開催都市紹介

「欧洲文化都市」及び「欧洲文化月間」開催都市を文化の側面を中心に簡単に紹介することとしたい。

「欧洲文化都市」開催都市

1985年	アテネ(ギリシャ)	1993年	アントワープ(ベルギー)
1986年	フィレンツェ(イタリア)	1994年	里斯ボン(ポルトガル)
1987年	アムステルダム(オランダ)	1995年	ルクセンブルク(ルクセンブルク)
1988年	ベルリン(ドイツ)	1996年	コペンハーゲン(デンマーク)
1989年	パリ(フランス)	1997年	テッサロニキ(ギリシャ)
1990年	グラスゴー(イギリス)	1998年	ストックホルム(スウェーデン)
1991年	ダブリン(アイルランド)	1999年	ワイマール(ドイツ)
1992年	マドリッド(スペイン)		

「欧洲文化月間」開催都市



1 「欧洲文化都市」開催都市

1985年 アテネ

人口—885,737人・ギリシア共和国の首都

アテネは、第一回の「欧洲文化都市」を開催した都市であるとともに、欧洲文明発祥の地でもある。したがって、アテネには多くの遺跡と多くの博物館が存在する。アクロポリスの丘はかつてアテネ王の宮殿であった所で、紀元前五世紀中葉に聖域となった。ここには、アテネの守護神たるアテーナ女神^{注1}にささげられたパルテノン神殿を初め、いくつかの小規模な神殿遺跡がある。丘のすぐ近くには、ディオニソス^{注2}劇場遺跡（紀元前四世紀）や、アレオパゴス^{注3}裁判所、フィロパッポス^{注4}記念碑（紀元後114-116）、そしてローマ時代のアゴラ^{注5}の遺跡などがある。あまりにも言及すべき遺跡が多く、そのすべてを列挙するのは不可能であるが、以上の有名なものほか、さらにハドリアヌス・ローマ皇帝図書館（二世紀）やハドリアヌス皇帝凱旋門、オリンピア様式のゼウス^{注6}神殿などを追加するにとどめる。

アテネの博物館や美術館の中から主要なものを挙げれば、国立考古学博物館、アクロポリス博物館、陶磁器博物館、ビザンチン博物館、ベナキ博物館、カネロプロス美術館、民族博物館、国立歴史博物館、軍事博物館、国立絵画館などがある。

■ ギリシャ神話において、ゼウス最高神の娘とされ、哲学・芸術・自然科学・手工業の神。古代ギリシャ諸都市の名はすべて、その守護神の名に因む。

■ ディオニソス神は別名をバッコスと言い、ギリシャ神話においてゼウス太陽神とセメレ女神の息子とされ、農作物とくに葡萄・葡萄酒の神。ディオニソス神信仰は、悲劇を伝統とするギリシャ演劇および詩歌の発達に大いに貢献したことで知られる。のち古代ローマ人は、この神をバッカフスと呼び、酒宴の神ともされた。

■ アレオパゴスとは、古代ギリシャ語のアレイオス・パゴス、すなわち戦争・暴力的力の神アレースに捧げられた丘のこと、当時のアテネにあっては、アレース神の神殿がこの丘の麓にあり、裁判所が丘の上に置かれていた。アレオパゴス裁判所は、政務官を監視するとともに、法律の解釈と殺人犯の裁判を行った。なおアレース神は、スバルタやテーベなどギリシャ北部の諸都市で一定の信仰を得ていたが、アテネでは常にアテーナ女神の知恵の力に敗北する神であった。

■ フィロパッポスとは当時のローマ総督で、その記念碑が、その名を取った丘の上にある。

■ アゴラとは、古代ギリシャ諸都市において、政治・宗教・経済活動の中心となっていた公共広場であって、すべての公共建造物がこれに面して建てられていた。

■ ゼウス神は、ギリシャ神話体系の最高神で、天の神にして地上の秩序と正義を司るとされ、のち古代ローマ人はこの信仰を吸収してユーピテルと名付けた。ゼウス神殿は数多く残っているが、最も有名なのが現アルバニア国境近くの都市遺跡ドードーネにあるもので、この他ではオリンピア、そしてクレタ島に残るもののが良く知られている。これらは、それぞれ信仰形態が異なっており、アテネに残っているものはオリンピア様式である。

1986年 フィレンツェ

人口—402,316人・トスカーナ州の州都（1865年から1871年までイタリア王国の首都）

フィレンツェという地名は、古代ローマの植民地フロレンティアにあるといわれる。フィレンツェには、芸術、金融、宗教、文化一般、そして政治など各分野の歴史があって、それぞれの厚みは膨大であり、これらを要約することは困難である。ただ、時と空間の両者を貫いて、この都市の意味を要約する世界的な言葉として「ルネッサンス」という語が挙げられる。フィレンツェが時代を創造するという偉大な役割を演じたのは、十三世紀から十四世紀にかけてであった。そして今日においても、フィレンツェに人々が寄せる関心は、やはりこの偉大なる時代の遺産に対してである。

フィレンツェの歴史は、フィエゾーレの丘にエトルリア人の町が、そして続いて古代ローマ人の町が築かれた時に始まる。1434年に至ってメディチ家の時代が始まり、それとともに政治と文化の分野で、フィレンツェは大躍進を遂げた。すなわち、地理的な位置と都市としての社会構造を利して、フィレンツェは、歴史と芸術が調和した「ルネッサンス」を造り出したのである。フィレンツェには極めて多くの歴史的建造物や美術館・博物館が存在し、そのすべてを挙げることは不可能に近い。中でも重要なものだけを列挙すれば、サンタ・マリア・デル・フィオーレ（花の聖母マリア）大聖堂（1296年）、ヴェッキオ（旧）宮殿（1314年）、ウフィツィ（＝政庁）美術館及びヴェッキオ（古）橋（ともに1565年）、アカデミア美術館、フランチェスコ修道会所属のサンタ・クローチェ大寺院（1294年）、サン・ロレンツォ教会を含むメディチ家礼拝堂群やサン・マルコ教会及び同修道院（いずれも1299年）、ドミニコ修道会所属のサンタ・マリア・ノヴェッラ（聖母再臨）教会（1360年）、国立美術館バルジェッロ美術館（1255年）、ピッティ美術館やボボリ庭園（両者とも1440年）などがある。

1987年 アムステルダム

人口—702,444人・オランダの憲法上の首都(国会等政府諸機関のある実際上の首都は、ハーグ)

アムステルダムの地名は、13世紀エイ湾に流入するアムステル川の河口にダムが築かれたことに由来する。アムステルダムを独特の街としているのは、その数多くの運河である。この町は常に水と共に生きてきた。住民は、運河沿いに家を建てたばかりではない。かれらはまた、まさに水上でも暮らしてきたのである。現在アムステルダム市には、500以上の橋と正式に登録された水上居住船が2400隻あり、その大部分は都市ガス、電気、電話、さらにはケーブル・テレビまで備えている。

この町の歴史は、中世後期まで遡る。町を急速に豊かにしたのは、漁業と商業であった。現在のアムステルダム旧市街の景観を形造っているのは、十七世紀及び十八世紀に建

てられた約7000の建築物であって、これらは歴史的建造物として保護されており、中には建物正面に、名称・銘の入った紋章や、画像のある紋章を掲げるものもある。これらの紋章は十八世紀末まで、表札ならびに道標としての役割を果たしていたもので、建物所有者の身分と職業を表示した。1795年にナポレオンが道路別の建物番号制度を導入し、これら紋章の役割が終りを告げたのであった。

アムステルダムの主要な美術館・博物館を列挙すれば、国立美術博物館、レンブラント記念館、国立ゴッホ美術館、アンネ・フランクの家、さらにアムステルダム歴史博物館、航空博物館、アムステルダム大学付属博物館、同アラルト・ピエルソン考古学博物館、そして海洋博物館などである。

1988年 ベルリン

人口—3,410,800人・ドイツ連邦共和国の首都

ベルリンは、ヨーロッパの分裂と統一の両者を象徴する都市である。総面積の約半分は森林、湖、河川などで占められている。ベルリンの地名は、十三世紀初めに、シュプレー川左岸にケルンが商業都市として姿を現わし、数年後、その隣接する右岸に姉妹都市としてベルリンが誕生したことによる。1307年には二つの都心を持つ都市ケルン＝ベルリンが形成された。1709年、ベルリンにプロシア国王の住居が置かれ、1871年、ドイツ帝国の首都となった。1936年にオリンピックを開催した後、1945年には連合国四列強の占領下に置かれ、1948年には11ヶ月間の封鎖を経て、政治的に街は二つに分割され、1961年には壁の構築によって物理的にも分割されたのであった。ベルリンが再統一されたのは、壁の崩壊一年後の1990年になってからであって、ドイツ連邦共和国政府がベルリンへ本拠を移したのは1991年のことに過ぎない。かくしてベルリンはおそらく、二十世紀の歴史の変遷に最も大きく左右されたヨーロッパ都市であると言えるだろう。

ベルリンはしかし、文化的に強い影響力を持つ都市であって、歴史的建造物の他に、160に及ぶ美術館・博物館を有する。主要なものとして、シャルロッテンブルク宮殿、五つの美術館・博物館がある博物館の島、ブリュッケ博物館、ベルリン美術館、工芸美術博物館、ベルリンの壁美術館、エジプト博物館、グルーネヴァルトの塔、国会議事堂、そして検閲禁止処分美術館などがある。

1989年 パリ

人口—2,152,423人・フランス共和国の首都

古代ローマ時代にセーヌ川にあるシテ島にパリの名前の由来となったケルト系のパリシイ族が住みついたことにより歴史に登場したパリは、フランスの首都として、その主要

な国家機関の所在地となっている。その歴史的発展は、フランスの発展と切り離せない関係にあり、特にナポレオンの第一帝政期から1960年にかけてパリには政治、経済、文化、ファッショニ等の全てが集中するという伝統が確立した。行政区域としては、都市計画により1区から20区まで時計回りの渦巻き状（エスカルゴの形）に区分けされ、各区は商業地域、官庁街地域、学生街地域、高級住宅街地域など区ごとに特徴を持っている。こうしたパリには、美術館・博物館と町の過去及び現在を物語る建築物等が満ち溢れている。その中からいくつかを列挙するなら、ガラスのピラミッドのあるルーヴル美術館、オルセー美術館、オランジュリー美術館、国立近代美術館（ポンビドーセンター）、軍事博物館、アジアの美術品を集めた国立のギメー美術館、装飾芸術美術館、国立民族・民芸博物館、バルザック記念館、中世の美術工芸品を集めた国立のクリュニー博物館とクリュニーのローマ浴場遺跡、ヴィクトル・ユーゴー記念館、アラブ世界研究所、ピカソ美術館、国立ロダン美術館、そしてラ・ヴィレットの科学技術博物館などがある。

パリにはまた多くの記念碑的建造物があり、いくつかを挙げれば、エトワール広場の凱旋門、デファンス地区の新凱旋門、マドレーヌ寺院、ノートルダム大聖堂、オペラ座、パンテオン、サクレ・クール寺院、サント・シャペル、そして全世界にパリを象徴するものとなっているエッフェル塔などということになる。

1990年 グラスゴー

人口—689,200人・ストラスクライド州の州都

グラスゴーはスコットランド最大の都市で、その歴史の重みを感じさせる雰囲気を湛えている。地名は、「緑の峡谷」を意味するケルト語gleschuに由来する。六世紀に聖マンゴー（別名聖ケンティジャーン）がクライド河沿岸に街を築いたのが始まりで、1238年には大聖堂の建設工事が始まり、1451年にはグラスゴー大学が創立された。「国富論」を発表し、自由主義経済学を確立したアダム・スミスはここで学んでいる。1811年には、大英帝国第二の都市となり、1896年には地下鉄が開通した。1901年には万国博覧会を開催し、1938年には大英帝国博覧会の開催地となった。

グラスゴーには多くの見るべきものが存在するが、中でも大聖堂、聖マンゴー宗教生活美術博物館、市議会、植物園などが重要である。また美術館や博物館も極めて多く、特に公園の数の多さが際立ち、さらに豪壮かつ多様な建築物のある街区の存在が有名である。

1991年 ダブリン

人口—478,389人・アイルランド共和国の首都

ダブリンの街がその礎石を据えたのは、千年以上も前のことでの、地名の起こりは、「黒

いよどみ」を意味するアイルランド語の「dubh linn」で、ダブリン湾に注ぐリフィー川の鉱物質を含んだ黒色の水の色に由来する。

現在の大規模な公共建造物や、幅広い大通り、エレガントな広場などは、十八世紀のダブリンの黄金時代のもので、この時期大英帝国の第二の都市と呼ばれていたが、英國支配から自由と独立を勝ち取ったのは1922年である。そして、ジェイムズ・ジョイス、ジョージ・バーナード・ショー、サミュエル・ベケット、ウイリアム・バター・イエイツ、ブラム・ストゥカーなどの作家たちが、文学の世界において、この町を世界的に有名にしたのであった。かくしてダブリンは、世界で唯一つ、三人ものノーベル賞作家を生んだ都市なのであって、1991年、ダブリン作家博物館が創設されることになった由縁である。

記念碑的建造物及び美術館・博物館の主なものを以下に挙げる一大統領官邸、アイルランド銀行本店、チェスター・ビーティー図書館とその付属オリエント美術博物館、クライスト・チャーチ大聖堂、ダブリン城、ダブリン市民博物館、ジョージ・バーナード・ショーン誕記念館、ギネス・ビール醸造所、ヒュー・レイン卿のコレクションを中心とした市立近代美術館、キルマナム王立病院付属のアイルランド近代美術館、ジェイムズ・ジョイスの塔、キルマナム監獄、マラハイド城、マーシュ歴史図書館、国立植物園、国立美術館、国立博物館、自然科学博物館、二十九番地屋敷、聖パトリック大聖堂、テンプル・バー地区、トリニティー・カレッジ（大学）、ワイトフライアーブリッジにあるカルメル修道会教会などである。

1992年 マドリッド

人口—2,984,576人・スペインの首都

マドリッドという地名は、9世紀後半にイスラム征服地をキリスト教徒から守るべく建設された砦の名前がアラビア語でマジュリートと呼ばれていたことに由来する。マドリッドは、標高655mにある開かれた街であって、四方八方からやって来た人達が住み着いて形成した都市であり、ここでは誰一人として「外人」であると意識することがない。確かにマドリッドは、優しさに満ちた楽しめる街であって、陽気さと喜びの首都であると人々が呼ぶ由縁である。国際連合はマドリッドを「平和の使節たる都」であるとも述べている。マドリッドの夜の殷賑は極めて獨特のものであって、これを表現する言葉がなかったから、「モビダ la mivida^㊷」という新語が発明されたほどである。王室の住居の置かれたこの街が、最終的にスペインの首都となったのは、1606年のことであった。そして、中世以後の時代の流れの中で、ハプスブルク家やブルボン家の王室、イサベル二世女王らを経て現在に至るまで、マドリッドは常に、都市としての豊かさを積み重ねて来たのである。

マドリッドに人々を引き付ける主要なものを列挙すれば、スペイン王家の美術コレクションを母体として世界有数の絵画館として名を連ねる国立プラド美術館、個人コレクション世界第二位の収蔵量を誇るティッセン・ボルネミッサ美術館、その他レティロ公園、

^㊷ 活発にして常に変化・移動することを表わす形容詞movido(女性形movida)を名詞化したもの。

カンポ・デル・モロ公園、サバティニ公園、ビリヤエルモサ（ビュアエルモサ）美術館、王立サン・フェルナンド美術アカデミー、王宮パラシオ・レアル、ラサロ・ガルディアノ美術館、ソフィア王妃財団芸術センター、デスカルサス・レアレス修道院、国立考古学博物館、野外彫刻美術館、自然科学博物館、アメリカ大陸博物館、考古学博物館などである。

1993年 アントワープ

アントワープについては、本文中で取り扱ったため、これを補完する意味で若干説明を詳細にした。

人口—470,349人・ベルギー第二の都市

ベルギーの首都ブリュッセルから北へ45km、オランダ国境まで30kmのベルギー北部のスヘルデSchelde川の河口に開けた世界第三位の港湾都市。ベルギーには、フラン語（オランダ語）、フランス語、ドイツ語の3つの公用語があり、ブリュッセルがフランス語圏の中心都市であるのに対し、アントワープはフラン語圏の中心都市でもある。アントワープAntwerpは英語で、フラン語ではアントウェルペンAntwerpen、フランス語ではアンヴェールAnversである。

この都市の名前アントワープは、十七世紀まで、しばしばフラン語でハントヴェルペンHantwerpen、即ち「手を投げ捨てる」と書かれていた。それは次の古い伝説による。即ち、歴史年代が紀元後に変わる頃のことであるが、シェルデ／エスコー河の河口が、ドルオン・アンティゴーンDruon Antigoonと言う巨人の支配下にあって、ここへやって来たすべての船乗りに巨額の通行料金を課し、その支払いを拒否すると、手足を切り取っていたという。ローマ人兵士シルヴィウス・ブラー博Silvius Braboがこの巨人を殺して、やつとその支配が終わったのだが、シルヴィウス・ブラー博は巨人の右手を切り取って、シェルデ／エスコー河に投げ捨てたのであった。伝説によれば、巨人の手を投げ捨てた場所一帯が、それ以後、ハントヴェルペン「手を投げ捨てる」と呼ばれるようになり、ケンペ恩地方の人々は今も、巨人の圧政から解放してくれたシルヴィウス・ブラー博を賛え、アントワープの中央広場には、その銅像が立っているのである。もっともアントワープという都市名については科学的説明もある。シェルデ／エスコー河口からやや上流シュテーンSteenの近くに沖積で出来た島、即ちアーンヴォルプaanworpないしアーンヴェルプaanwerpがあり、古代にはここに集落が形成されていたことによる、というものである。いずれにせよアントワープは、このように古い歴史を持つ都市であって、以来常に、繁栄を誇ってきたのである。

十三世紀になると、当時既に千年の歴史を持つ町を中心にして、アントワープは特に大きな発展を遂げ始めた。今日においても、道路及び保護されている建造物の位置を見れば、町が同心円を描くようにして拡大発展して行ったことが読み取れる。こうして現在、発展の中核となった中世以来のシュテーン街区や、ゴシック建築の聖母大聖堂、そしてル

ネッサンス建築として注目すべき市庁舎が、旧市街の中心をなしている。そして、これらの大規模建築物に寄り添うように、十七、十八世紀のバロック様式やロココ様式の住宅建築物が軒を並べている。さらに十九世紀の市域拡大期には、あらゆる種類のネオ・クラシック様式の建築が行われるとともに、当時始まったアール・ヌーヴォーの街区も形成されたのであった。

今日のアントワープを特徴づけられるのは、「港」、「ダイヤモンド」、「ルーベンス」の三つであろう。まず、「港」の面積は14,055haで、長さは全長126.2kmにも及びオランダとの国境まで伸びている。「ダイヤモンド」については、19世紀後半に得た植民地ベルギー領コンゴ（現在のザイール）から入るダイヤモンド原石と15世紀以降からの伝統技術ダイヤモンドカッティング技術により、世界の約7割の原石がここに送り込まれ研磨される、世界のダイヤモンド取引の要となっている。「ルーベンス」については、今も残るアトリエ「ルーベンスの家」において数々の制作に取り組み、17世紀におけるフランドル絵画の時代を代表する巨匠としての評価を確立した。その評価により、欧州各国の国王からの注文が相次ぎ、欧州各地の宮殿にその作品は散財することとなったが、最良のコレクションは、生涯の大半を過ごしたここアントワープの王立美術館にある。

アントワープで見るべきものとしては、次のようなものがある。中央鉄道駅（19世紀）、市庁舎、ブラーボの噴水、商品取引所、旧穀物取引所、コヘルス＝オシ通りを中心とするズレンボルフ地区、王立美術アカデミー、王宮、倉庫群、裁判所（1877年）、国立銀行（1879年）、王子宮殿（16世紀）、ベギーヌ会修道院、十六世紀建造物の木造正面、メルカトル＝オルテリウス記念館（16世紀）、オーストリア館（18世紀）、聖ニコラス礼拝堂（15世紀）、中央ユダヤ教徒集会所（1893年）、ダイヤモンド産業地区、ミッデルハイム公園の野外彫刻展示など。

アントワープの教会の建物は極めて有名だが、中でも聖母大聖堂や、聖カロルス・ボロメウス／聖シャルル・ボロメ教会、聖パウルス／聖ポール教会、聖ヤコブス／サンジャック教会、聖アンドレアス／聖アンドレ教会が重要である。

他方アントワープには、多くの美術館・博物館もある。王立美術館、ルーベンスの家、プランティン＝モレトゥス印刷博物館及びこれに付属する市立銅版画展示所、国立シュテーン海洋博物館、民俗博物館マイヤー・バン・デン・ベルフ美術館、リッダー・シュミット・バン・ヘルダー美術館、郷土民俗博物館、文書館、フランドル民俗文化博物館、ビール醸造博物館、マーフデン美術博物館、近代美術館、県立ダイヤモンド博物館、県立写真芸術館、ロッコッホ邸（17世紀）、ヨルデンス記念館（17世紀）、アブラハム・ベルフーベーン記念館、県立シュテルクスホフ博物館、平和センター、さらにアントワープの町の模型展示や埋立地博物館などである。

1994年 リスボン

人口—830,500人・ポルトガルの首都

「リスボンの街こそ、まず最初に人々にお見せしなければならない芸術品である」—1994年度「欧洲文化都市」を開催する都市としての紹介パンフレットの冒頭の文 章である。この地は石器時代に既に、人々の群れが住み着いていた所であり、フェニキア人はここに商業活動の前線を置いた。続いてギリシャ人、ローマ人、さらに後には北から未開の人間集団がこの地にやって来たのだが、やがてアラブ人がこの地に定着することになった。こうして街は、オリシボ⁹ [古典ギリシャ語] Ολισύπος、フェーリーキタース・ユーリア [古典ラテン語] Felicitas Julia、アスハボウナ [アラビア語] Aschbounaと、名前を次々に変えたのであった。そして1147年、この街を手に入れたいと望んだ年若いアフォンソ・エンリク伯爵が、北から来た十字軍の援助を得てこれをアラブ人から奪取、自らポルトガル最初の王位に就いたのであった。アフォンソ・エンリク国王は、モスクを取り壊して同じ場所に大聖堂を建設し、さらに聖ヴィンセントをリスボンの守護聖人とともに、この聖人に捧げる教会堂を建てて、そこに聖遺骨を埋葬した。そして1255年、アフォンソ三世がリスボンをポルトガルの首都と定めたが、やがて、マデイラス諸島やアゾレス諸島、アンゴラ、モザンビーク島、インドへの航海路、ブラジル、そして極東が発見されるに及んで、リスボンはその容貌を変化させることになる。即ち、大帝国の建設とともに、この街は幾多の異文化、多種多様な習慣が渦巻く所となり、多くの文明が融け合うるつほとなつたのである。

非常に多くの贅を極めた建築物がリスボンを彩っていたのだが、1755年11月1日の大地震で、街の三分の二が壊滅した。その後、合理的な計画に沿って近代的な街が再建されたが、リスボンはそれ以後拡大と近代化の歩みをやめていない。

博物館・美術館など、主要な見るべきものとしては、ジェロニモス修道院、ベレンの塔、アジェダ宮殿、国立古代美術館、アズレージョ（装飾タイル）博物館、考古学博物館、ド・カルモ考古学博物館、グルベンキャン美術館、リスボン博物館、市立演劇博物館、衣服博物館、電気博物館、国立考古学・人類学博物館、音楽博物館、馬車博物館、海洋博物館などがある。

1995年 ルクセンブルク

人口—75,377人・ルクセンブルク大公国の首都

963年、ズィーゲフロイ伯爵がボックと呼ばれる大岩盤の上に城砦の建設を始め、これがサン・ミシェル教会近くの市場とともに、最初の城壁を巡らして、ルクセンブルク市の中核となった。その後、数世紀が経過する間に、市の西側には第二、

第三の城壁が造られたが、他の部分はアルゼット川とペトリュス川の渓谷を形作る岩壁が天然の要害を成した。1443年ブルゴーニュ公爵家がルクセンブルク市を攻略し、当時のヨーロッパの勢力地図の中で戦略的に重要な位置を占めるようになり、当時の世界で最も守りの強固な町となった。町は1867年から1883年にかけて、その防備を解かれたが、今もルクセンブルク城の残存部分やかつてのサンテスプリ（聖靈）城砦、砦、全長20kmに及ぶ地下回廊網、いくつかの巨大な城砦に設ける塔状の防護攻撃施設、トロワ・グランの城砦塔、スペイン領時代に造られた櫓、そして数多くの橋梁など、かつてを偲ばせる多くのものが残っている。

旧城壁の内部には、極めて興味深いものが多い。即ち、大公爵宮殿（16-18世紀）、外務省（1751年）、ノートル・ダーム大聖堂（1621年）、大公爵廟、旧イエズス会神学校、市庁舎（1838年）、サン・ミシェル教会（10-16世紀）、サン・キラン礼拝堂（14世紀以前）、サン・ジャン教会（17世紀）などがそれである。ルクセンブルク市はまた、国立博物館及び国立図書館などを有する他、欧州裁判所、翻訳センター等欧州連合EUの多くの機関の所在地となっている。

1996年 コペンハーゲン

人口—464,566人・デンマークの首都

500年間にわたってコペンハーゲンは、現在のノルウェー、スウェーデン南部、そしてドイツ北部を包含する王国の中心であった。十二世紀にこの街が城壁を巡らした頃には、バルト海諸国の大半も、この王国の支配を受けていた。その結果、北欧のあらゆる部分から、それぞれの文化と風俗習慣、そして伝統を携えて、人々がコペンハーゲンにやって来たから、この街は長い間、多言語都市であり続けた。少なくとも三つの言語が使われていたのである。即ち、貴族階級はフランス語を用い、政治と実業界ではドイツ語が使われ、デンマーク語が共通語の役割を果たしていたのであった。

コペンハーゲンに住んだ人々として有名なのは、哲学者キュルケゴール、国民高等学校制度を作り、数多くの賛美歌を作曲したグルントフィヒのほか、その物語と伝説集の舞台としてこの町を用いた童話作家アンデルセンである。こうして現在のコペンハーゲンには、遊園地公園チボリ公園等の公園の他、国立美術館に代表される50の美術館・博物館、王立劇場に代表される50の劇場、100に上る音楽団体、250の図書館、そして50の地域ラジオ放送局が存在する。

コペンハーゲン独特のものとして、夜間講座による文化活動がある。これはヨーロッパでも他に例を見ないもので、市民の多くは、芸術や言語、諸科学の夜間講座に出席し、さらにはその他の知的ないし文化的活動に従事するのである。おそらく、この町が他より人間的であるのは、そのためであろう。

1997年 テッサロニキ

人口—977,528人・ギリシア第二の都市

テッサロニキは、アテネに次ぐギリシア第二の都市で、マケドニア地方の首都である。テッサロニキの名前は、紀元前316年、当時のマケドニア王カッサンドロスがこの町の基礎を築き、アレキサンドル大王の妹であるテッサロニキを妻として迎えたことに由来する。テッサロニキは、ビザンチン帝国においても第二の都市となり、豪壮な建物、教会、修道院などを建造したが、教会は当初の初期キリスト教様式から、後にはあらゆる宗教建築様式を採用するようになった。

現在のテッサロニキには、考古学発掘地が溢れているが、その中から重要なものを以下に列挙する。ガレー商船宮殿（紀元後300年）、公共広場アゴラ及びローマ人の野外劇場、ローマ人の浴場、ニュプヘ礼拝堂、ガレー商船館半円形ドーム（紀元後305年）、巨大な円形建物ロトンダ（紀元後300年）、ガレリウスの凱旋門（紀元後303年）、アギオス・ディミトリオス教会（紀元後5世紀）、平面十字形のホシオス・ダヴィッド教会（紀元5世紀）、エプタピルグロ城壁と白い塔（15世紀）、聖デメトリオス教会とそのクリプト（地下施設）、聖ソフィア教会（8世紀）、聖にして聖なるハルケオーン（金物製造業者の守護聖人としての聖母）教会（1028年）、聖エカテリニ教会（13世紀）、聖使徒教会（14世紀）、聖ニコラオス・オルファノス教会（14世紀）、預言者エリア教会（1360年）など。

テッサロニキにはまた、多くの博物館・美術館がある。主なものを挙げれば、以下のようである。即ち、考古学博物館、民俗・民族学博物館、マケドニア戦闘博物館、白い塔博物館、絵画館、市立絵画館、聖デメトリオス教会クリプト博物館、マケドニア研究所絵画館、北ギリシア文化センター、マケドニア近代美術センター、テッサロニキ技術博物館などである。

1998年 ストックホルム

人口—679,364人・スウェーデンの首都

ストックホルムは元々、メーラレン湖がバルト海とつながる部分にある十四の島の上に築かれた町であって、今も水面の広がりが、この都市面積の三分の一を占める。確かに数多くのルーン文字を刻んだ石碑やヴァイキング時代の多様な遺物がありはするが、町としてのストックホルムの歴史は700年ほどにしかならない。この町は現在、重工業による環境汚染がなく、現代的かつ活力のある商業都市となっている。街の規模は人間的な範囲に留まり、市民たちはそれを、世界の首都のうち最も清潔な都市に仕上げている。

スウェーデンの黄金時代を偲ばせる重厚な建築物が、ストックホルム及びその近郊に残っており、城郭や貴族の邸宅は、グスターヴ三世の黄金時代の家具や調度を今に伝えている。ストックホルムの最も古い街区ガムルー・スターインには、王城、王城博物館、グスターヴ三世骨董博物館、大教会、リッダーホールム教会などがある。

この他にも記念碑的建造物が街のあちこちに散在している。ノーベル賞受賞者の晩餐会が開かれる市庁舎、ドロットニンホールム城、ウールリクスダール城（17世紀）、ヴァーサ博物館、中世博物館、カークネスの塔、スカンセン民俗博物館（野外博物館として世界最古）、水族館、科学博物館、ミッレス公園、森林公園、国立博物館、近代美術館、王立オペラ座、ハーガ公園、ノルマン文化博物館、歴史博物館などがそれである。

1999年　ワイマール

人口—58,000人

ワイマールは、ドイツ・チューリンゲン州に位置する都市で、旧東ドイツ（ドイツ民主主義共和国）の諸州とともに連邦共和国に加盟した。この町は、有名な人々が長く居住したことでも名高く、ザクセン・ワイマール公国時代に首相を務めた文豪ゲーテをはじめ、文学のシラー、ヘルダー、ウィーラント、絵画のルーカス・クラーナッハ、音楽のヨハン・セバスティアン・バッハ、フランツ・リスト、リヒャルト・シュトラウスさらにワイマール派やバウハウス派の名画家たちが、この町にインスピレーションを求め居住することになったのであった。哲学者ニーチェもまた、この地で人生の最後を送ったのであった。このようにこの町は、18世紀から19世紀にかけて芸術家が集まって芸術の一大中心地となり、今では、これらの人々の住居の大部分が、見学に訪れる対象となっている。

ワイマールが有名なのは、これらの偉人たちのためだけではなく、ドイツ国立劇場の故でもある。事実、ドイツ最初の共和国たるワイマール共和国の憲法は、この国立劇場で開かれた国会で成立したものなのである。

町には古くかつ有名な建物が溢れているが、中でも宮殿、居城、チューリンゲン先史時代博物館、聖ヤコブ教会、十九世紀商人住宅博物館、聖ペテロ・パウロ教会、プリンス宮廷、アンナ・アマーリア公爵妃図書館、そしてカトリックの聖心教会などが重要である。

2 「欧洲文化月間」開催都市

1992年 クラクフ

人口—750,500人・ポーランド南部マウォポルスカ地方の中心都

クラクフは言わば博物館都市であって、バベルの丘の上に建つ王城が町を見下ろしている。この王城は数世紀にわたって、ポーランド王室の住居であった。クラクフの名前の由来は、バベルの王城に住んでいた竜を退治したという伝説上の人物クラク公に由来する。クラクフについて言及する最古の歴史的文書は十世紀末のもので、それによれば、この町が商業において重要な位置を占めているとある。ポーランドの復興王カズイミエシュ一世が1040年、クラクフを実質的にポーランドの首都とした。クラクフが最盛期を迎えたのはカズイミエシュ三世大王の時で、大王は1364年、クラクフ・アカデミーを創立した。1596年、首都がワルシャワへ移転し、1864年にはオーストリア帝国に編入され、クラクフは衰退に向かった。

クラクフの歴史を物語る市中心部は、その中世都市としての構造と豊かな芸術作品の故に、近郊のヴィエルチカ岩塩鉱山とともに1978年、ユネスコによって「文化及び自然の人類財産」に指定された。現在、王城には「全国美術コレクション」が展示されている。この他、国立クラクフ美術館、クラクフ市立歴史博物館、民族学博物館、コペルニクスが学んだヤギエウォ大学（1364年）、考古学博物館、国立アウシュヴィツ博物館などがある。

1993年 グラーツ

人口—232,155人・オーストリア南東部シュタイアーマルク州の州都

グラーツの名前は、10世紀後半にシュロスベルクに築かれた砦に由来し、その名は小さな砦を意味するスラブ語gradecに依っている。

グラーツでは、現代芸術・アヴァンギャルドが素晴らしい歴史的建造物と調和して展開され、繁華街を行くと美しい公園に行き当たり、新しい集合住宅群は今も田園の風を残す郊外に広がり、町のある丘陵の周囲には山々がそびえている。

現代建築にまじって歴史的な傑作建造物が、ゴシックやバロック、ネオ・クラシックなど様々な様式で存在する。歴史的なものとしては、大聖堂ドーム、中世の鎧兜や武器のコレクションとして世界最大のツォイクハウス（武器庫の意）、中央広場、フランチェスコ会教会、オペラ座、砦式建築様式のレービ教会、靈廟マウゾレウム、カリヨン（メロディーを奏でるようになっている時鐘）の塔、城壁、時計

塔、救いの聖母教会、ヨアンノイム美術館などがある。

ついでながら、ウィーンの有名な「スペイン式馬術学校」のための馬を供給するリピツツアンス種馬場は、このグラーツの町にある。

1994年 ブダペスト

人口—2,000,955人・ハンガリーの首都

ブダペストは、ドナウ川のほぼ中流に、ドナウ川を挟んで位置する。川の西岸はブダ地区でいくつかの丘が連なり、東岸はペスト地区で平野から成っている。1872年に両市が合体して今日のブダペストとなった。ブダとペストは6つの橋と2つの鉄橋で結ばれ、夜のライトアップされたドナウ川周辺は欧州で最高に美しい場所のひとつと言われる。

ブダペストは歴史の重みを持った都市であり、数多く残る建物や建造物はオーストリア・ハンガリー帝国の時代や、社会主義時代の東欧の中心都市であったことなど過去の栄光を彷彿とさせるが、今や、共産主義の崩壊によって、西欧諸国に対して開かれた町となった。

ハンガリーでは、伝統と文化が極めて重要な意味を持ち、エトベシュ・ロランド(ブダペスト)大学等17大学の存在、セーチェニ国立図書館のほか市立図書館の発達、国立美術館、民族博物館等の美術館・博物館、国立劇場、国立オペラ劇場、リスト音楽院等の劇場などが充実している。

「欧州文化月間」を開催するに当たって、ブダペストは多くの文化イベントを予定している。国際書籍見本市や、工芸実演による伝統維持のための諸種の催し、「武器の祖先・祖先の武器」を初めとする各種の芸術展覧会と歴史展覧会、中世工芸の展示会、全国民俗舞踊フェスティバル、民俗演劇公演、祭の柱を巡る民俗舞踊、さらには多くの音乐会や夏の野外コンサートなどが、その主要なものである。

1995年 リュブリヤナ

人口—323,291人・スロヴェニア共和国の首都

歴史を遡ればリュブリヤナには、ケルト人、イルリア人、ローマ人、スラブ人などが次々に住み着き、その名もエモーナ [古典ラテン語] Emona、ライバッハ [ドイツ語] Laibach、ルビアナ [アラビア語] Lubianaと転変した。この町が初めて文書に記録されたのは、1144年のことである。町の発展が始まったのは十三世紀初めで、神聖ローマ帝国のカルニオラ州の首都となった。1335年、リューブリヤナはハプスブルク家

の支配下に入り、1511年と1895年の二回にわたり、大地震により町が破壊されたが、その度にリュブリヤナは市街の近代化を行った。

誕生したばかりの独立国家スロヴェニアの首都たるリュブリヤナには、多くのローマ時代の遺跡や、イタリア・バロック様式及びオーストリア・バロック様式の歴史的建造物、さらにはスロヴェニア風の建築物などが存在する。これらの内から主要なものを次に掲げる。フランチエスコ会教会（1646-1660年）、三重橋、大聖堂（12世紀）、司教館（1512年）、神学校（1708年）、城砦（9世紀）、市庁舎（1718年）、聖ヨハネ教会（1613年）、スロヴェニア科学技術アカデミー（18世紀）、国立大学図書館（1935年）、聖マリア教会（1268年）、リュブリヤナ大学（1898年）、女子修道会教会（1693年）、ローマ時代の城壁、国立博物館（1821年）、近代美術館（1945年）、ティヴォリ城（17世紀）、国立美術館（1896年）、オペラ座（1882年）など。

1995年 ニコシア

人口—171,000人・キプロス共和国の首都

ニコシアは、紀元前二千年紀の都市遺跡の上に築かれている町であるが、首都となったのは十一世紀になってからのことには過ぎない。その間、ギリシャ人、アッシリア人、エジプト人、ペルシャ人、アレキサンドル大王、エジプトを支配したギリシャのプトレマイオス王朝、ローマ人、ビザンチン帝国、イングランドの獅子心王リチャード一世、現フランスのポワトゥ出身のリュジニヤン家、ヴェネツィア人、トルコ人、英国人などが次々にニコシアの町とキプロスを支配し、三千五百年に及ぶ異民族支配を経験した後の1960年になって、ようやくこの国は独立を達成したのであった。しかし、1974年のキプロス紛争のためニコシアはギリシア側とトルコ側に分断され、現在も分断されたままとなっている。

ニコシアを空から見ると、市街は星形をして広がっており、その中心に旧市街がある、十六世紀のヴェネツィア人が築いた城壁の外側には新市街が広がっている。上述の異民族のすべては、ニコシアを文化的に豊かにした。見るべきものとして、次のようなものがある。キプロス博物館、ビザンチン博物館、マカリオス三世財団絵画館、民芸博物館、国民運動博物館、聖ヨハネ大聖堂（1662年）、大司教館、ハイダーオルガーキス・コルネッソス記念館（18世紀）、ファマグスタ門、クリサリニオティッサ教会（1450年）、オメリエモスク（1571年）、プハネロメーニ教会（1872年）、トリピオティス教会（1695年）、ライキ・イートニア国民会館、近代キプロス絵画公館、英國国教会セント・ポール教会（1893年）、市立劇場、キュッコ修道院別館（1890年）、金属民芸博物館、キプロス郵便・切手博物館など。

用語解説

ここでは、各機関について、本レポートを理解する上で必要最小限度の説明に留めたことをお断りしておく。

1 欧州評議会(*le Conseil de l'Europe*)

欧州評議会は、現在、旧東欧諸国であるブルガリア、ハンガリー、チェコ、スロヴァキア、ポーランドを含む32ヶ国で構成され(ロシア等は加盟手続中)、欧州に共通の未来を造り上げることを目的とする。

その基盤は、人権擁護、複数政党による民主主義、欧州文化のアイデンティティ確立、現代社会における重要課題の解決方策検討等に置かれている。

従って、EC及びこれを継承したEU(欧州連合)と混同してはならない。しかしながら、EU加盟の12ヶ国はすべて欧州評議会のメンバーである。

2 EC(EU)閣僚理事会(*le conseil des ministres*)

EC(EU)の立法府に相当する機関である。各加盟国の閣僚によって構成され、EC(EU)委員会から提案される政策案、法律案、予算案を最終的に決定する権限を持つ。審議内容によって出席する閣僚は異なり、農業政策は農業担当大臣、財政政策は財政担当大臣の出席という仕組になっている。EC(EU)委員会がEC(EU)全体の利益を代表するのに対し、閣僚理事会は、各加盟国の利益を反映する。

3 EC(EU)委員会(*la Commission*)

EC(EU)の政府に相当する機関である。委員は各構成国から選任されるが、構成国の利益を考慮するのではなく、EC(EU)全体の利益の実現を目指す点で、閣僚理事会と異なる。したがって、委員は構成国からの指示は一切受けず、完全に独立して職務を行う。その職務は各種政策案や法律案、予算案などを作成し閣僚理事会に提案し、決定後は、それを執行する。

4 欧州議会(*le Parlement européen*)

EC(EU)の機関であるが、議会といつても立法機関ではなく、EC(EU)委員会に対する諮問・監督権の他、EC(EU)予算案に対する拒否権、修正権、決算承認権を持つ機関である。議員は、加盟国の直接選挙によって選出され、構成国の代表ではあるが、欧洲全体の利益のために行動する欧州市民の代表としての地位を得ている。

参考文献

日本文献

- 1 「ヨーロッパ市民権の誕生」 安江則子 丸善 1992年
- 2 「EC市場統合」 アルマン・ビザゲ 稲垣文雄・村上直久共訳 白水社 1992年
- 3 「欧州共同体(EC)の研究－政治力学の分析」 細谷千博・南義清共編 新有堂 1988年
- 4 「欧州統合と「ヨーロッパの中の地方自治体」」 廣瀬克哉 (財)自治体国際化協会 1992年

外国文献

- 1 Conseil,conclusions des ministres de la culture réunis au sein du Conseil de 1985 relatives à la ville européenne de la culture ,JOCE du 22 juin 1985,N.C 153/1
- 2 Parlement européen,résolution sur les villes européennes de la culture ,23 novembre 1990,JOCE 24.12.1990,N.C324/350
- 3 Conseil,conclusions des ministres de la culture réunis au sein du Conseil du 18 mai 1990 relatives au choix futur de la"ville européenne de la culture" et à la manifestation spéciale du mois culturel européen (90/C 162/01),JOCE du 3.juillet.1990,N.C 162/1
- 4 Conseil,conclusions des ministres de la culture réunis au sein du Conseil du 18 mai 1992 concernant le choix des villes européennes de la culture après 1996 et le "mois culturel européen", (92/C 151/01),JOCE 16 juin 1992 N C151/1
- 5 Conseil,conclusions des ministres de la culture réunis au sein du Conseil du 12 novembre 1992 concernant la procédure de désignation des villes européennes de la culture ,(91/C 336/02),JOCE 19 décembre 1992,N C336/3
- 6 Jurisclasseur européen,Conseil de l'Europe
- 7 fascicule 6110,paragraphes 40 et suivants
- 8 fascicule 211,paragraphes 11 et suivants
- 9 Dossiers de presse et dépliants touristiques Anvers 1993

「CLAIR REPORT」既刊分のご案内

NO	タ イ ル	発刊日
第91号	欧洲文化都市制度	1994/ 9/19
第90号	1994年英国統一地方選挙と欧洲議会議員選挙	1994/ 8/ 1
第89号	英国における多民族社会の中の学校教育	1994/ 6/20
第88号	アメリカの学校給食	1994/ 6/20
第87号	現代フランス都市計画の手法（2）	1994/ 5/30
第86号	現代フランス都市計画の手法（1）	1994/ 5/30
第85号	フランス・アキテーヌ州の沿岸リゾート整備	1994/ 5/27
第84号	地方公務員のための「イギリス憲法入門」	1994/ 5/23
第83号	統一ドイツと財政調整－連邦制財政システムは生き残れるか－	1994/ 4/15
第82号	アイルランド－国の仕組みと地方自治－	1994/ 3/25
第81号	イングランドの地方団体と住宅政策	1994/ 3/15
第80号	内側から見た英國	1994/ 3/15
第79号	英國の地方団体構造改革の動向	1993/12/24
第78号	英國社会保障の現状及び今後の動向	1993/10/15
第77号	イングランドとウェールズの水道	1993/10/15
第76号	フランスの高齢者福祉（2）	1993/ 9/30
第75号	フランスの高齢者福祉（1）	1993/ 9/30
第74号	英國の1993年統一地方選挙	1993/ 8/31
第73号	コントラクト・シティ	1993/ 7/30
第72号	英國における地方議員と地方行政	1993/ 7/20
第71号	ロンドンの地方団体について	1993/ 7/12
第70号	フランスの地方公務員制度－第2部－	1993/ 7/12
第69号	シティズン・チャーター－現代版マグナカルタ？－	1993/ 6/30
第68号	米国の成長管理政策（2）－州政府編－	1993/ 5/20
第67号	米国の成長管理政策（1）－総論・地方政府編－	1993/ 5/20
第66号	フランスの地方公務員制度－第1部－	1993/ 3/31